

子育て・親育ち

佐藤 和子

勤務助産婦(東京都在住)

私はマラソンランナー

朝5時に聞こえる、生後10か月の次男の泣き声。これが私の長い1日の開始サイレンです。おっぱいをあげてオムツ交換の後、次男を背負ったまま主人の弁当を作り、6時過ぎに送り出します。朝食の準備をしている間に、2歳半の長男が起きて、台所のドアの前で「かあちゃん、だっこ、だっこ」と両手を広げて泣き出します。それ以後、子ども2人が寝つく夜の10時までの我家の状況は、まさに戦場です。

朝起きてから寝るまで、私はまるでマラソンをしているかのようです。気づいてみると、髪はボサボサ、手はガサガサ、肌はボロボロ、今年初めてかかった花粉症で鼻はズルズル。

今回は、久しぶりにペンを持つ機会をいただきましたので、私自身の子育てから思うことを書いてみようと思います。

3歳児神話に悩む

「三つ子の魂百まで」のことわざにもあるように、乳幼児期の体験は、人間の一生を決定するほど重要なものであるから、性格の基礎ができる3歳までは母親が育てるほうが子どものためにはよい、という3歳児神話が、私の周辺にはいまだ根強く残っています。実はこのことが、働く母親を悩ませ、そして追いこんでいるのではないのでしょうか。

私の場合、長男の時は5か月で復職し、保母さんに預けることに罪悪感をもち、退職も考えまし

た。その時、この3歳児神話を、自分の中でしっかりとらえて考えてみました。

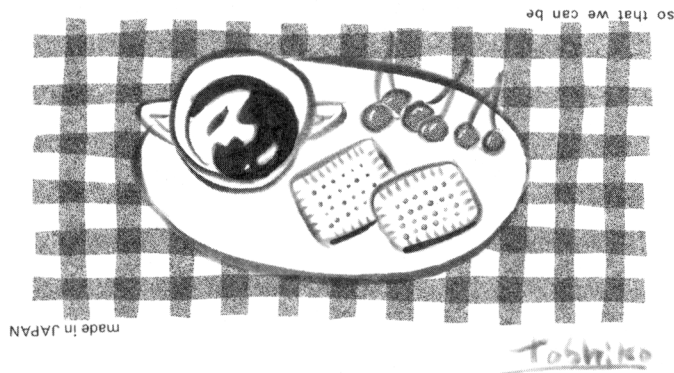
乳幼児は、周りの大人から十分に愛されることで自分に自信をもち、人間関係の基礎を作ります。しかし、愛情は母親だけからではなく、父親、親類、友人、保育者、地域の人々などからも受けるものです。そう考え直してみると、子どもを生後数か月で保育園に預けることに対して、気持ちが楽になりました。

乳幼児期の親のかかわり方はとても重要です。それだからこそ、かかわり方を間違わないように神経質になってしまっていますが、「みんなで育てる」という視点も大切だと思っています。そして子どもは、自分の力で生きていく能力もあるのだと思います。

強く優しく、そして夢を
持ち続けて欲しい

先日、保育園の入所面接で保母さんから「お子さんにはどう育てて欲しいですか」「どう育児をしていますか」という質問がありました。突然だったので言葉につまっていると、夫が「良いことと悪いことの区別ができるように育てたい」と答えたのでした。私と全く同じ意見だったのでびっくりしましたが、うれしい言葉でした。自宅に戻ってからも、2人で子育てについて話し合ってみました。

親が子どもにできることは、子どもの外見を整えることではなく、豊かな心を育てるということ。社会で生きていく知恵は、他人を思いやる優



しさを、どんな時でも笑顔でいられる強さからつくられるのではないのでしょうか。

親の日常会話や行動を、子どもはじっと見ていて、子どもは親をとおして世の中を見ているのです。親も、子どもの見本となるように育たなくては。親になった責任を夫婦2人で改めて感じ、お互い何を思っているのかに気づいたことは、大きな収穫でした。これからも何度も、自分たち自身で「子どもをどう育てたいの?」と問い続けていこうと思っています。

ところで、私が生まれ育った奄美大島は、子どもの夢や冒険心が育つには最適の場所でした。海の向こうに広がる別世界に想像力がかきたてられ、水平線を往来する船に異国へのあこがれを乗せた少女時代。今でもその場所に立ち、キラキラした海を見つめていると、あの頃と同じ夢を潮風が運んでくれます。夢や冒険心は、親が子どもに与えるものではありません。どんな環境で育っていても、子どもの中に自然と芽ばえるものです。その芽が子どもと同じように、元気に成長して欲しいと願います。

新しい生命に触れていたい

今、私は助産婦という職業をもち、共働きというライフスタイルを選択し、いろいろな意味でギリギリの生活を送っています。それでも働き続ける原動力は、この仕事が、私にとって天職であると信じていることです。

数年間の自分の仕事上の体験をとおして、おこがましいかもしれませんが、生命の誕生や死の瞬間には、きっと選ばれた人間だけが立ち合うことができるのだと感じてきました。看護職と患者ではなく、魂と魂が触れ合う瞬間。私はそういう時間がもてるこの仕事に出会えたことに、感謝しています。

母と子の2つの生命を守る責任の重みや、生と死に向かい合う時の厳しさに、未熟な私は、時々押しつぶされてしまいそうにもなりますが、今は家族、特に2人の息子の小さな手が、私を一生懸命に支え、前に進めてくれています。「子どもがいるから働けない」のではなく、「子どもがいるから頑張れる」そう教えてくれている子どもたちに感謝しています。そして、この少子化の時代に、子どもを持つことを選択した、これから出会う多くの人々を支えていきたい、と思っています。

3歳児神話に悩まされ退職を考えた時も、自分のことは省みる時間もなくマラソンランナーのように走り続けている今も、子どもたちに望んでいるように、私自身も、強く優しく、夢を持ち続ける姿勢を忘れずに、助産婦として新しい生命に触れていきたいと思っています。

同じ時期に助産婦になり、臨床で働き始めた私の周りの同僚は、現在いろいろな形で助産婦活動をしています。その一人で、確かな技術と、素朴で優しい気持ちを持ち続けている渡辺明美さんにバトンを渡します。(さとう・かずこ)